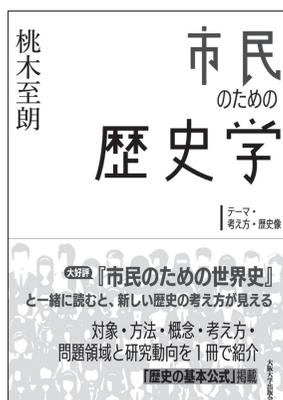


桃木 至朗 著

市民のための歴史学

——テーマ・考え方・歴史像

紹介者 小川 正樹



大阪大学出版会

2022年3月

A5判

402ページ

本体2,500円

目次

序 章	現代世界の中の歴史学
第1章	歴史学はなにをどう問題にしてきたか、こ なかつたか
第2章	史料（資料・史資料）とはなにか
第3章	時間の認識と時代区分
第4章	ローカルな歴史とグローバルな歴史
第5章	環境と人類、技術と科学の歴史
第6章	暮らしと経済の歴史
第7章	政治と外交の歴史
第8章	戦争と平和・軍事の歴史
第9章	法と秩序・制度の歴史
第10章	社会と共同体・公共性の歴史
第11章	ジェンダーの歴史、家族の歴史
第12章	文化・芸術・思想と情報・メディアの歴史
第13章	歴史と記憶、歴史と現在
終 章	歴史学の未来
付録	

「歴史学は役に立たない学問なのか？」著者はこの問いに対して、「歴史学はおもしろい」と全力で反論する。高校や大学で未来の国家主権の担い手である生徒・学生を「市民」として育成することはむしろ社会の役に立つ、と主張する。本書では、学生と教員に対し歴史学とは何か、歴史学が扱う領域や分野にはどのようなものがあるのかを可能な限りまとめている。1人の研究者がここまで扱うことができるのか、と思うほど広い分野を取り上げ、これまでのすぐれた研究成果だけではなく、最新の研究動向までも11のジャンルに渡ってまとめている。

本書の大きな特徴は、109個にも及ぶ「歴史の公式」と章ごとに「課題」が掲載されている点である。著者は複雑で難解な現代社会を理解し、その課題を解決するための1つの手段として歴史学は役に立つことを一つひとつの分野について説明していく。各章の始まりに「公式」を配置し、歴史学の基礎概念や基本的な考え方を学び、汎用的な歴史的思考力を身につける訓練を繰り返すことを求める。その訓練が章のなかに挿入された「課題」や「資料」である。著者はこれらに取り組むために、歴史学の論点だけではなく、論点を深めるための指針や新しい切り口も提供する。読者は「公式」を理解し、「課題」に取り組むことを通じて著者と対話し、著者からの問いかけに対して答えを考え、さらに問いに対する自分自身の考えを深める自問自答を繰り返すようになる。こうして読者は著者との絶え間ない対話を通して、歴史学のおもしろさと重要性を理解することが可能となる。著者からの問いかけは決して上から目線などではなく、むしろ読者へのエールであり、「公式」や「課題」に取り組む読者にどこまでも優しく、そして希望に満ちあふれている。

著者は中学・高校の教員に大いに期待している。大学や研究機関と「市民」との橋渡し役を果たせる立場にいる教員に対して、これまで「大阪大学歴史教育研究会」や「高大連携歴史教育研究会」など数多くの活動を実践し、結果を出してきた著者は、現役の教員と未来の教員にはその役割を果たすことが十分に可能であると信じている。

最後に、著者がめざす「市民」には、多数派の悪意のない無神経が少数派を苦しめないことが求められている。肝に銘ずべき指摘である。多元的民主主義を実現していくために何が必要なのか、私たち教員には何ができるのかを改めて認識させてくれる良書である。

（おがわ・まさき／函館ラ・サール中学校高等学校教頭）